ちやんには度たび泣かされたものである。しかしそれは喧嘩の上だつた。從つて僕も三度に一度は德ちやんを泣かせた記憶を持つてゐる。德ちやんは確か總武鐵道の社長か何かの次男に生れた、負けぬ氣の强い餓鬼大將だつた。

しかし小學校へはいるが早いか僕は忽ち世間に多い「いぢめつ子」と云ふものにめぐり合つた。「いぢめつ子」は杉浦譽四郎である。これは僕の隣席にゐたから何か口實を拵へては度々僕をつねつたりした。おまけに杉浦の家の前を通ると狼に似た犬をけしかけたりもした。(これは今日(こんにち)考へて見れば Grey hound と云ふ犬だつたであらう。)僕はこの犬に追ひつめられた揚句、とうとう或疊屋の店へ飛び上つてしまつたのを覺えてゐる。

僕は今漫然と「いぢめつ子」の心理を考へてゐる。あれは少年に現はれたサアド型性慾ではないであらうか？　杉浦は僕のクラスの中でも最も白皙の



少年だつた。のみならず或名高い富豪の妾腹に出來た少年だつた。

## 二十一　畫

僕は幼稚園にはひつてゐた頃には海軍將校になるつもりだつた。が、小學校へはいつた頃からいつか畫家志願に變つてゐた。僕の叔母は狩野勝玉と云ふ芳涯の乙弟子に緣づいてゐた。僕の叔父も亦裁判官だつた雨谷に南畫を學んでゐた。併し僕のなりたかつたのはナポレオンの肖像だのライオンだのを描く洋畫家だつた。

僕が當時買ひ集めた西洋名畫の寫眞版は未だに何枚か殘つてゐる。僕は近頃何かの次手にそれ等の寫眞版に目を通した。するとそれ等の一枚は、樹下に金髮の美人を立たせたウキスキイの會社の廣告畫だつた。

## 二十二　水泳

僕の水泳を習つたのは日本水泳協會だつた。水泳協會に通つたのは作家の中では僕ばかりではない。永井荷風氏や谷崎潤一郎氏もやはりそこへ通つた筈である。當時は水泳協會も蘆の茂つた中洲から安田の屋敷前へ移つてゐた。僕はそこへ二三人の同級の友達と通つて行つた。清水昌彥もその一人だつた。

「僕は誰にもわかるまいと思つて水の中でウンコをしたら、すぐに浮いたんでびつくりしてしまつた。ウンコは水よりも輕いもんなんだね。」

かう云ふことを話した清水も海軍將校になつた後、一昨年（大正十三年）の春に故人になつた。僕はその二三週間前に轉地先の三島からよこした清水



の手紙を覺えてゐる。

「これは僕の君に上げる最後の手紙になるだらうと思ふ。僕は喉頭結核の上に腸結核も併發してゐる。妻は僕と同じ病氣に罹り僕よりも先に死んでしまつた。あとには今年五つになる女の子が一人殘つてゐる。……まづは生前の御挨拶まで。」

僕は返事のペンを執りながら、春寒の三島の海を思ひ、何とか云ふ發句を書いたりした。今はもう發句は覺えてゐない。併し「喉頭結核でも絶望するには當らぬ」などといふ氣休めを並べたことだけは未だにはつきりと覺えてゐる。

## 二十三　體刑

僕の小學校にゐた頃には體刑も決して珍しくはなかつた。それも横顔を張りつける位ではない。胸ぐらをとつて小突きまはしたり、床の上へ突き倒したりしたものである。僕も一度は擲られた上、習字のお双紙をさし上げたまま、半時間も立たされてゐたことがあつた。かう云ふ時に擲られるのは格別痛みを感ずるものではない。しかし、大勢の生徒の前に立たされてゐるのは切ないものである。僕はいつか伊太利のファッショは社會主義者にヒマシュを飲ませ、腹下しを起させると云ふ話を聞き、忽ち薄汚いベンチの上に立つた僕自身の姿を思ひ出したりした。のみならずファッショの刑罰も或は存外當人には殘酷ではないかと考へたりした。

## 二十四　大水



僕は大水にも度たび出合つた。が、幸ひどの大水も床の上へ來たことは一度もなかつた。僕は母や伯母などが濁り水の中に二尺指しを立て、一分殖ゑたの二分殖ゑたのと騒いでゐたのを覺えてゐる。それから夜は目を覺ますと絶えずどこかの半鐘が鳴りつづけてゐたのも覺えてゐる。

## 二十五　答案

確か小學校の二三年生の頃、僕等の先生は僕等の机に耳の青い藁半紙を配り、それへ「可愛いと思ふもの」と「美しいと思ふもの」とを書けと言つた。僕は象を「可愛いと思ふもの」にし、雲を「美しいと思ふもの」にした。それは僕には眞實だつた。が、僕の答案は生憎先生には氣に入らなかつた。

「雲などはどこが美しい？　象も唯大きいばかりぢやないか？」

先生はかうたしなめた後、僕の答案へ×印をつけた。

## 二十六　加藤清正

加藤清正は相生町二丁目の横町に住んでゐた。と云つても勿論鎧武者ではない。極く小さい桶屋だつた。しかし主人は標札によれば、加藤清正に違ひなかつた。のみならずまだ新しい紺暖簾の紋も蛇の目だつた。僕等は時々この店へ主人の清正を覗きに行つた。清正は短い顎髯を生やし、金槌や鉋を使つてゐた。けれども何か僕等には偉さうに思はれて仕かたがなかつた。

## 二十七　七不思議

その頃はどの家もランプだつた。從つてどの町も薄暗かつた。かう云ふ町は明治とは云ふ條、まだ「本所の七不思議」と全然縁のない訣ではなかつた。現に僕は夜學の歸りに元町通りを歩きながら、お竹倉の藪の向うに莫迦囃しを聞いたのを覺えてゐる。それは石原か横網かにお祭りのあつた囃しだつたかも知れない。しかし僕は二百年來の狸の莫迦囃しではないかと思ひ、一刻も早く家へ歸るやうにせつせと足を早めたものだつた。



## 二十八　動員令

僕は例の夜學の歸りに本所警察署の前を通つた。警察署の前にはいつもと變り、高張提灯が一對ともしてあつた。僕は妙に思ひながら、父や母にそのことを話した。が、誰も驚かなかつた。それは僕の留守の間に「動員令發せらる」と云ふ號外が家にも來てゐたからだつた。僕は勿論日露戰役に關する

いろいろの小事件を記憶してゐる。が、この一對の高張提灯ほど鮮かに覺えてゐるものはない。いや、僕は今日(こんにち)でも高張提灯を見る度に婚禮や何かを想像するよりもまづ戰爭を思ひ出すのである。

## 二十九　久井田卯之助

久井田と云ふ文字は違つてゐるかも知れない。僕は唯彼のことをヒサイダさんと稱してゐた。彼は僕の實家にゐる牛乳配達の一人だつた。同時に又今日ほど澤山ゐない社會主義者の一人だつた。僕はこのヒサイダさんに社會主義の信條を敎へて貰つた。それは僕の血肉には幸か不幸か滲み入らなかつた。が、日露戰役中の非戰論者に惡意を持たなかつたのは確かにヒサイダさんの影響だつた。



ヒサイダさんは五六年前に突然僕を訪問した。僕が彼と大人同志の社會主義論をしたのはこの時だけである。(彼はそれから何箇月もたたずに天城山の雪中に凍死してしまつた。)しかし僕は社會主義論よりも彼の獄中生活談などに興味を持たずにはゐられなかつた。

「夏目さんの『行人』の中に和歌の浦へ行つた男と女とがとうとう飯を食ふ氣にならずに膳を下げさせる所があるでせう。あすこを牢の中で讀んだ時にはしみじみ勿體ないと思ひましたよ。」

彼は人懷こい笑顏をしながら、そんなことも話して行つたものだつた。

## 三十　火花

やはりその頃の雨上りの日の暮、僕は馬車通りの砂利道を一隊の步兵の通

るのに出合つた。歩兵は銃を肩にしたまま、默つて進行をつづけてゐた。が、その靴は砂利と擦れる度に時々火花を發してゐた。僕はこのかすかな火花に何か悲壯な心もちを感じた。

それから何年かたつた後、僕は白柳秀湖氏の「離愁」とか云ふ小品集を讀み、やはり歩兵の靴から出る火花を書いたものを發見した。(僕に白柳秀湖氏や上司小劍氏の名を敎へたものも或はヒサイダさんだつたかも知れない。)それはまだ中學生の僕にも僕自身同じことを見てゐたせいか、感銘の深いものに違ひなかつた。僕はこの文章から同氏の本を讀むやうになり、いつかロシヤの文學者の名前を、――殊にトウルゲネフの名前を覺えるやうになつた。それ等の小品集はどこへ行つたか、今はもう本屋でも見かけたことはない。しかし僕は同氏の文章に未だに愛惜を感じてゐる。殊に東京の空を罩める



「鳶色の靄」などと云ふ言葉に。

## 三十一　日本海々戰

僕等は皆日本海々戰の勝敗を日本の一大事と信じてゐた。が、「今日晴朗なれども浪高し」の號外は出ても、勝敗は容易にわからなかつた。すると或日の午飯の時間に僕の組の先生が一人、號外を持つて敎室へかけこみ、「おい、みんな喜べ。大勝利だぞ」と聲をかけた。この時の僕等の感激は確かに又國民的だつたのであらう。僕は中學を卒業しない前に國木田獨歩の作品を讀み何でも「電報」とか云ふ短篇にやはりかう云ふ感激を描いてあるのを發見した。

「皇國の興廢この一擧にあり」云々の信號を掲げたと云ふことは恐らくは如

何なる戰爭文學よりも一層詩的な出來事だつたであらう。しかし僕は十年の後、海軍機關學校の理髮師に頭を刈つて貰ひながら、彼も亦日露の戰役に「朝日」の水兵だつた關係上、日本海々戰の話をした。すると彼はにこりともせず、極めて無造作にかう云ふのだつた。

「何、あの信號は始終でしたよ。それは號外にも出てゐたのは日本海々戰の時だけですが。」

## 三十二　柔術

僕は中學では柔術を習つた。それから又濱町河岸の大竹と云ふ道場へもやはり寒稽古などに通つたものである。中學で習つた柔術は何流だつたか覺えてゐない。が、大竹の柔術は確か天眞揚心流だつた。僕は中學の仕合ひへ出



た時、相手の稽古着へ手をかけるが早いか、忽ち見事に巴投げを食ひ、向う側に控へた生徒たちの前へ坐つてゐたことを覺えてゐる。當時の僕の柔道友だちは西川英次郎一人だつた。西川は今は鳥取の農林學校か何かの敎授をしてゐる。僕はその後も秀才と呼ばれる何人かの人々に接して來た。が、僕を驚かせた最初の秀才は西川だつた。

## 三十三　西川英次郎

西川は渾名をライオンと言つた。それは顏がどことなしにライオンに似てゐた爲である。僕は西川と同級だつた爲めに少なからず啓發を受けた。中學の四年か五年の時に英譯の「獵人日記」だの「サッフォオ」だのを讀み嚙つたのは西川なしには出來なかつたであらう。が、僕は西川には何も報いるこ

とは出來なかつた。若し何か報いたとすれば、それは唯足がらをすくつて西川を泣かせたことだけであらう。

僕は又西川と一しよに夏休みなどには旅行した。西川は僕よりも裕福だつたらしい。しかし僕等は大旅行をしても、旅費は二十圓を越えたことはなかつた。僕はやはり西川と一しよに中里介山氏の「大菩薩峠」に近い丹波山と云ふ寒村に泊り、一等三十五錢と云ふ宿賃を拂つたのを覺えてゐる。しかしその宿は清潔でもあり、食事も玉子燒などを添へてあつた。

多分まだ殘雪の深い赤城山へ登つた時であらう。西川はこごみ加減に歩きながら、急に僕にこんなことを言つた。

「君は兩親に死なれたら、悲しいとか何とか思ふかい？」

僕はちよつと考へた後、「悲しいと思ふ」と返事をした。



「僕は悲しいとは思はない。君は創作をやるつもりなんだから、さう云ふ人間もゐると云ふことを知つて置く方が善いかも知れない。」

しかし僕はその時分にはまだ作家にならうと云ふ志望などを持つてゐた訣ではなかつた。それをなぜさう言はれたかは未だに僕には不可解である。

## 三十四　勉強

僕は僕の中學時代は勿論、復習と云ふものをしたことはなかつた。しかし試驗勉強は度たびした。試驗の當日にはどの生徒も運動場でも本を讀んだりしてゐる。僕はそれを見る度に「僕ももつと勉強すれば善かつた」と云ふ後悔を伴つた不安を感じた。が、試驗場を出るが早いか、そんなことはけろりと忘れてゐた。

## 三十五　金

僕は一圓の金を貰ひ、本屋へ本を買ひに出かけると、なぜか一圓の本を買つたことはなかつた。しかし一圓出しさへすれば、僕が欲しいと思ふ本は手にはひるのに違ひなかつた。僕は度たび七十錢か八十錢の本を持つて來た後、その本を買つたことを後悔してゐた。それは勿論本ばかりではなかつた。僕はこの心もちの中に中產下層階級を感じてゐる。今日でも中產下層階級の子弟は何か買ひものをする度にやはり一圓持つてゐるものの、一圓をすつかり使ふことに逡巡してはゐないであらうか？

## 三十六　虛榮心



或冬に近い日の暮、僕は元町通りを歩きながら、突然往來の人々が全然僕を顧みないのを感じた。同時に又妙に寂しさを感じた。しかし格別「今に見ろ」と云ふ勇氣の起ることは感じなかつた。薄い藍色に澄み渡つた空には幾つかの星も輝いてゐた。僕はそれ等の星を見ながら、出來るだけ威張つて歩いて行つた。

## 三十七　發火演習

僕等の中學は秋になると、發火演習を行つたばかりか、東京の或る聯隊の機動演習にも參加したものである。體操の教官——或陸軍大尉はいつも僕等には嚴然としてゐた。が、實際の機動演習になると、時々命令に間違ひを生じ、おほ聲に上官に叱られたりしてゐた。僕はいつもこの教官に同情したこ

とを覺えてゐる。

## 三十八　渾名

あらゆる東京の中學生が教師につける渾名ほど刻薄に眞實に迫るものはない。僕は生憎今日ではそれ等の渾名を忘れてゐる。が、今から四五年前、僕の從姉の子供が一人、僕の家へ遊びに來た時、或中學の先生のことを「マッポンがどうして」などと話してゐた。僕は勿論「マッポン」とは何のことかと質問した。

「どう云ふことも何もありませんよ。唯その先生の顏を見ると、マッポンと云ふ氣もちがするだけですよ。」

僕はそれから暫くの後、この中學生と電車に乘り、偶然その先生の風丰に



接した。するとそれは、――僕もやはり文章では到底眞實を傳へることは出來ない。つまりそれは渾名通り、正に「マッポン」と云ふ感じだつた。

## 猫の魂

「てつ」は源さんへ緣づいた後も時々僕の家へ遊びに來た。僕はその頃「てつ」の話した、かう云ふ怪談を覺えてゐる。――或日の午後、「てつ」は長火鉢に頰杖をつき、半睡半醒の境にさまよつてゐた。すると小さい火の玉が一つ、「てつ」の顏のまはりを飛びめぐり始めた。「てつ」ははつとして目を醒ました。火の玉は勿論その時にはもうどこかへ消え失せてゐた。しかし「てつ」の信ずる所によればそれは四五日前に死んだ「てつ」の飼ひ猫の魂がじやれに來たに違ひないと云ふのだつた。

## 草双紙

僕の家の本箱には草双紙が一ぱいつまつてゐた。僕はもの心のついた頃からこれ等の草双紙を愛してゐた。殊に「西遊記」を飜案した「金毘羅利生記」を愛してゐた。「金毘羅利生記」の主人公は或は僕の記憶に殘つた第一の作中人物かも知れない。それは岩裂(いはさき)の神と云ふ、兜巾鈴懸けを裝つた、目なざしの恐しい大天狗だつた。

## お狸様

僕の家には祖父の代からお狸様と云ふものを祀つてゐた。それは赤い布團にのつた一對の狸の土偶だつた。僕はこのお狸様にも何か恐怖を感じてゐ



た。お狸様を祀ることはどう云ふ因縁によつたものか、父や母さへも知らないらしい。しかし未だに僕の家には薄暗い納戸の隅の棚にお狸様の宮を設け、夜は必ずその宮の前に小さい蠟燭をともしてゐる。

## 蘭

僕は時々狹い庭を歩き、父の眞似をして雜草を拔いた。實際庭は水場だけにいろいろの草を生じ易かつた。僕は或時冬青の木の下に細い一本の草を見つけ、早速それを拔きすててしまつた。僕の所業を知つた父は「折角の蘭を拔かれた」と何度も母にこぼしてゐた。が、格別、その爲に叱られたと云ふ記憶は持つてゐない。蘭は何處でも石の間に特に一二莖植ゑたものだつた。

文藝的な、餘りに文藝的な

## 一　「死者生者」

「文章倶樂部」が大正時代の作品中、諸家の記憶に殘つたものを尋ねた時、僕も返事をしようと思つてゐるうちにつひその機會を失つてしまつた。僕の記憶に殘つてゐるものはまづ正宗白鳥氏の「死者生者」である。これは僕の「芋粥」と同じ月に發表された爲、特に深い印象を殘した。「芋粥」は「死者生者」ほど完成してゐない。唯幾分か新しかつただけである。が、「死者生者」は不評判だつた。「芋粥」は――「芋粥」の不評判だつたのは吹聽せずとも善い。「讀後感とでも云ふのかな。さう云ふものの深い短篇だね。」――僕は當時久米正雄君の「死者生者」を讀んだ後、かう言つたことを覺えてゐる。が、「文章倶樂部」の問に應じた諸家は誰も「死者生者」を擧げてゐなかつたら



しい。しかも「芋粥」は幸か不幸か諸家の答への中にはいつてゐる。

この事實の證明する通り、世人は新らしいものに注目し易い。從つて新らしいものに手をつけさへすれば、兎に角作家にはなれるのである。しかしそれは必ずしも一爪痕を殘すことではない。僕は未だに「死者生者」は「芋粥」などの比ではないと思つてゐる。のみならず又正宗氏自身も短篇作家としては、「死者生者」を書いた前後に最も藝術的ではなかつたかと思つてゐる。が、當時の正宗氏は必ずしも人氣はなかつたらしい。

## 二　時　代

僕は時々かう考へてゐる。――僕の書いた文章はたとひ僕が生まれなかつたにしても、誰かきつと書いたに違ひない。從つて僕自身の作品よりも寧ろ

一時代の土の上に生へた何本かの艸の一本である。すると僕自身の自慢にはならない。(現に彼等は彼等を待たなければ、書かれなかつた作品を書いてゐる。勿論そこに一時代は影を落してゐるにしても。)僕はかう考へる度に必ず妙にがつかりしてしまふ。

## 三　日本の文藝の特色

日本の文藝の特色、――何よりも讀者に親密(intime)であること。この特色の善惡は特に今は問題にしない。

## 四　アナトオル・フランス

Nicolas Ségur の「アナトオル・フランスとの對話」によれば、この微笑した懷疑主義者は實に徹底した厭世主義者である。かう云ふ一面は Paul Gzell の「アナトオル・フランスとの對話」(?)にも現はれてゐない。彼は「あなたの作中人物は皆微笑してゐるではないか?」といふ問に對し、野蠻にもかう返事をしてゐる。――「彼等は憐憫の爲に微笑してゐる。それは文藝上の技巧に過ぎない。」

このアナトオル・フランスの說によれば人生は唯意志する力と行爲する力との上に安定してゐる。しかも我々は意志する爲には一點に目を注がなければならぬ。それは何びとにも出來ることではない。殊に理智と感受性との呪ひを受けた我々には。

「エピキユウルの園」の思想家、ドレフイイユ事件のチヤンピオン、「ペングインの島」の作家だつた彼もここでは面目を新たにしてゐる。尤も唯物主義

的に解釋すれば、彼の頽齡や病なども或は彼の人生觀を暗いものにしてゐたかも知れない。しかしこれは彼の作品中、比較的等閑に附せられたものを、——或は事實上出來の惡いものを（たとへば「赤い卵」の如き）彼の一生の文藝的體系に結びつける綱を與へてゐる。病的な「赤い卵」なども彼には必然な作品だつたのであらう。僕はこの對話や書簡集から更に新らしい「アナトオル・フランス論」の書かれることを信じてゐる。

このアナトオル・フランスは十字架を背負つた牧羊神である。尤も新時代は彼の中に唯前世紀から今世紀に渡る橋を見出すばかりかも知れない。が、世紀末に人となつた僕はやはりかう云ふ彼の中に有史以來の僕等を見出してゐる。



## 五　自然主義

自然は僕等が一定の年齡に達した時、僕等に「春の目ざめ」を與へてゐる。それから僕等が餓えた時、烈しい食慾を與へてゐる。それから僕等が戰場に立つた時、彈丸を避ける本能を與へてゐる。それから何年か（或は何箇月か）同棲生活の後、その女人と交ることに對する嫌惡の情を與へてゐる。それから、……

しかし社會の命令は自然の命令と一致してゐない。のみならず屢反對してゐる。そればかりならば差支へない。（？）しかし僕等は僕等自身の中に自然の命令を否定する何か不思議なるものも持ち合せてゐる。從つてあらゆる自然主義者は理論上最左翼に立たなければならぬ。或は最左翼の向うにある暗

黑の中に立たなければならぬ。

「地球の外へ！」と云ふボオドレエルの散文詩は決して机の上の產物ではない。

## 六　ハムズン

性慾の中に詩のあることは前人もとうに發見してゐた。が、食慾の中にも詩のあることはハムズンを待たなければならなかつたのである。何と云ふ僕等の間拔けさ加減！

## 七　語彙

「夜明け」と云ふ意味の「平明」はいつか「手のこまない」と云ふ意味に變



り、「死んだ父」と云ふ意味の「先人」はいつか「古人」と云ふ意味に變つてゐる。僕自身も「姿」とか「形」とか云ふ意味に「ものごし」と云ふ言葉を使ひ、凄まじい火災の形容に「大紅蓮」と云ふ言葉を使つた。僕等の語彙はこの通り可也混亂を生じてゐる。「隨一人」と云ふ言葉などは誰も「第一人」と云ふ意味に使はないものはない。が、誰も皆間違つてしまへば、勿論間違ひは消滅するのである。從つてこの混亂を救ふ爲には、――一人殘らず間違つてしまへ。

## 八　コクトオの言葉

「藝術は科學の肉化したものである」と云ふコクトオの言葉は中つてゐる。尤も僕の解釋によれば、「科學の肉化したもの」と云ふ意味は「科學に肉をつ

けた」と云ふ意味ではない。科學に肉をつけることなどは職人でも容易に出來るであらう。藝術はおのづから血肉の中に科學を具へてゐる筈である。いろいろの科學者は藝術の中から彼等の科學を見つけるのに過ぎない。藝術の——或は直觀の尊さはそこに存してゐるのである。

僕はこのコクトオの言葉の新時代の藝術家たちに方向を錯らせることを惧れてゐる。あらゆる藝術上の傑作は「二二が四」に終つてゐるかも知れない。しかし決して「二二が四」から始まつてゐるとは限らないのである。僕は必ずしも科學的精神を抛つてしまへと云ふのではない。が、科學的精神は詩的精神を重んずる所に逆説的にも潜んでゐると云ふ事實だけを指摘したいのである。



## 九　「若し王者たりせば」

「我若し王者たりせば」と云ふ映畫によれば、あらゆる犯罪に通じてゐた抒情詩人フランソア・ヴイヨンは立派な愛國者に變じてゐる。それから又シャロット姫に對する純一無雜の戀人に變じてゐる。最後に市民の人氣を集めた所謂「民衆の味かた」になつてゐる。が、若しチャプリンさへ非難してやまない今日のアメリカにヴイヨンを生じたとすれば、——そんなことは今更のやうに言はずとも善い。歴史上の人物はこの映畫の中のヴイヨンのやうに何度も轉身を重ねるのであらう。「我若し王者たりせば」は實にアメリカの生んだ映畫だつた。

僕はこの映畫を見ながら、ヴイヨンの次第に大詩人になつた三百年の星霜

を數へ、「蓋棺の後」などと云ふ言葉の怪しいことを考へずにはゐられなかつた。「蓋棺の後」に起るものは神化か獸化(?)かの外にある筈はない。しかし何世紀かの流れ去つた後には、――その時にも香を焚かれるのは唯「幸福なる少數」だけである。のみならずヴイヨンなどは一面には愛國者兼「民衆の味方かた」兼模範的戀人として香を焚かれてゐるではないか?

しかし僕の感情は僕のかう考へるうちにもやはりはつきりと口を利いてゐる。――「ヴイヨンは兎に角大詩人だつた。」

## 十　二人の紅毛畫家

ピカソはいつも城を攻めてゐる。ジアン・ダアクでなければ破れない城を。彼は或はこの城の破れないことを知つてゐるかも知れない。が、ひとり石火



矢の下に剛情にもひとり城を攻めてゐる。かう云ふピカソを去つてマテイスを見る時、何か氣易さを感じるのは必しも僕一人ではあるまい。マテイスは海にヨットを走らせてゐる。武器の音や煙硝の匂はそこからは少しも起つて來ない。唯桃色に白の縞のある三角の帆だけ風を孕んでゐる。僕は偶然この二人の畫を見、ピカソに同情を感ずると同時にマテイスには親しみや羨ましさを感じた。マテイスは僕等素人の目にもリアリズムに叩きこんだ腕を持つてゐる。その又リアリズムに叩きこんだ腕はマテイスの畫に精彩を與へてゐるものの、時々畫面の裝飾的効果に多少の破綻を生じてゐるかも知れない。若しどちらをとるかと言へば、僕のとりいたのはピカソである。兜の毛は炎に燒け、槍の柄は折れたピカソである。……(昭和二年五月六日)

# 芥川龍之介著書目錄

## 大版

羅生門（短篇小說集）　著者裝幀　大正六年五月　阿蘭陀書房刊（絕版）

羅生門　鼻　孤獨地獄　運　虱　酒蟲　忠義　芋粥　父　猿　手巾　尾形了齋覺え書　煙管　貉

羅生門（短篇小說集）　著者裝幀　大正八年八月　新潮社刊（絕版）

羅生門　普及版　大正十二年六月　新潮社刊

傀儡師（短篇小說集）　著者裝幀　大正八年一月　新潮社刊（絕版）

一、「侏儒の言葉」の本文は他の著作集と同じく、雜誌「文藝春秋」の切り拔きに著者自身手を加へたものに據つた。その爲、――「神祕主義」他二、三のものが省かれることになつたのである。

但し、「辨護」以下の侏儒の言葉は「侏儒の言葉」の序文と共に著者が、特に書き加へた未發表原稿（これは此の本と同時に雜誌「文藝春秋」紙上に發表されるもの、）に據つた。

二、本文七十五頁「ムアアの言葉」

――「偉大なる畫家は名前を入れる場所をちやんと心得てゐるものである。又決して同じ所に二度と名前を入れぬものである。」實際、

勿論「又決して同じ所に二度と名前を入れぬことは」如何なる畫家にも不可能である。

（以下略）

校正者はこの「實際」、の二字を削つた。これは當を得たことではないかも知れない。――しかし當時の原稿の散らばつてしまつた今日では。その當時の原稿はいま誰の手にあるのか。

三、四十二頁　惡　――「藝術的氣質を持つた青年の「人間の惡」を發見するのは誰よりも遲いのを常としてゐる。」

著者はまた次の樣に、書いてある。

「藝術的氣質を持つた青年は最後に人間の惡を發見するものである。」

四、百二十頁（著者自身の原稿）

「新生」讀後

果して「新生」はあつたであらうか？

ピュルコフのトルストイ傳を讀めば、トルストイの「わが懺悔」や「わが宗敎」の譃だつたことは明らかである。……

五、百七十四頁　「追憶」の「水屋」の中の二行目

僕は未だに目に見えるやうに、と額の赤い水屋の爺さんが水桶の水を水甕の中へぶちまける姿を覺えてゐる。

校正者は「と」を削り、「に」の下に、を置いた。これは必ずしも正しい訂正ではない。

六、「追憶」の最後「猫の魂」他三章は本來なら百七十二頁「てつ」の直後に這入るべきである。が、著者自身保存した切り拔きの中に洩れてゐたため、校了後に氣づき、止むを得ず最後に加へることとした。

七、「侏儒の言葉」の序文　は　本文侏儒の言葉の卷頭に這入るべきかと思ふ。が、「侏儒の言葉」「澄江堂雜記」「病中雜記」「追憶」「文藝的な、餘りに文藝的な」と續くことは、――此の序文を。校正者は必ずしも不當とは信じない。

（一九二七・一一・五）

奉教人の死　るしへる　枯野抄　開化の殺人

蜘蛛の絲　袈裟と盛遠　或る日の大石内藏之助

首の落ちた話　毛利先生　戲作三昧　地獄變

傀儡師　普及版　大正十二年六月　新潮社刊

影燈籠（短篇小說集）　野口功造裝幀　大正九年一月　春陽堂刊（絕版）

蜜柑　沼地　きりしとほろ上人傳　龍

開化の良人　世之助の話　小品四種　あの頃の自分の事

じゆりあの吉助　疑惑　魔術　葱

バルタザル（飜譯）　春の心臟（飜譯）

影燈籠　普及版　大正十三年六月　春陽堂刊



夜來の花（短篇小說集）　小穴隆一裝幀　大正十年三月　新潮社刊（絕版）

秋　黑衣聖母　山鳴　杜子春

動物園　捨兒　舞蹈會　南京の基督

妙な話　鼠小僧次郎吉　影　秋山圖

アグニの神　女　奇怪な再會

夜來の花　普及版　大正十三年五月　新潮社刊

點心（隨筆集）　森田恒友裝幀　大正十一年五月　金星堂刊

沙羅の花（選集）　小穴隆一裝幀　大正十一年八月　改造社刊（絕版）

（短篇小說）　羅生門　鼻　運

藪の中　拳敎人の死　きりしとほろ上人傳　るしへる

枯野抄　或る日の大石內藏之助　南京の基督

秋山圖　開化の良人　舞蹈會　秋

將軍　葱　蜜柑

（童　話）　魔術　杜子春　蜘蛛の絲

（紀行文）　槍ヶ嶽紀行　南國の美人

（小品文）　尾生の信　東洋の秋　沼

（隨　筆）　澄江堂雜記

沙羅の花　普及版　印刷中



邪宗門（中篇小說）　大正十一年十一月　春陽堂刊（絕版）

春服（短篇小說集）　小穴隆一裝幀　大正十二年五月　春陽堂刊（絕版）

六の宮の姫君　トロッコ　おぎん　往生繪卷

お富の貞操　三つの寶　庭　神神の微笑

奇遇　藪の中　母　好色

報恩記　老いたる素戔嗚尊　わが散文詩

春服　普及版　大正十三年四月　春陽堂刊

百艸（隨筆集）　恩地孝四郎裝幀　大正十三年八月　新潮社刊

支那游記（隨筆集）　小穴隆一裝幀　大正十四年十一月　改造社刊

梅・馬・鶯（隨筆集）　佐藤者夫裝幀　大正十五年十二月　新潮社刊

湖南の扇（短篇小說集）　小穴隆一裝幀　昭和二年六月　文藝春秋社出版部刊

湖南の扇　溫泉だより　淺草公園　誘惑

春の夜　尼提　カルメン　彼

彼、第二　僕は　○君の新秋　春の夜は

鬼ごつこ　或社會主義者　塵勞　年末の一日

海のほとり　蜃氣樓

## 小版

煙草と惡魔（短篇小說集）（新進作家叢書第八編）　大正六年十一月　新潮社刊

鼻（短篇小說集）（新興文藝叢書第八編）　大正七年七月　春陽堂刊

戲作三昧（短篇小說集）（ヴエストポケツト傑作叢書第三編）　大正十年九月　春陽堂刊

地獄變（短篇小說集）（同叢書第四編）　大正十年九月　春陽堂刊（絕版）

或る日の大石內藏之助（短篇小說集）（同叢書第九編）　大正十年十月　春陽堂刊（絕版）

芋粥（短篇小說集）（同叢書第十編）　大正十年十月　春陽堂刊

將軍（短篇小說集）（代表的名作選集第卅七編）　大正十一年三月　新潮社刊

奇怪な再會（短篇小說集）（金星堂名作叢書第八編）　大正十一年十月　金星堂刊

地獄變（短篇小說集）　袖珍型　大正十五年五月　文藝春秋社出版部刊

或る日の大石內藏之助（短篇小說集）　袖珍型　大正十五年五月　文藝春秋社出版部刊

昭和二年十二月三日印刷
昭和二年十二月六日發行

【侏儒の言葉】
（定價金二圓二十錢）

著作者　芥川龍之介

發行者　東京市日本橋區本小田原町廿三番地
小峰八郎

印刷者　東京市小石川區上富坂町三十番地
新倉誠一

印刷所　東京市小石川區上富坂町三十番地
新倉東文堂

發行所　東京市日本橋區本小田原町二十三番地
文藝春秋社出版部
電話日本橋二八〇五番
振替東京七四三七八番

# 創作書類

芥川龍之介氏著

| | | | |
|---|---|---|---|
| 侏儒の言葉 | 四六版美裝 | 定價金二圓廿錢 送料十二錢 | 近刊 |
| 湖南の扇 | 四六版美裝 | 定價金五十五錢 送料六錢 | |
| 地獄變 | 袖珍 | 定價金五十五錢 送料六錢 | |
| 或日の大石內藏助 | 袖珍 | 定價金五十五錢 送料六錢 | |

菊池寛氏著

| | | |
|---|---|---|
| 新珠 | (上、中、下) | 各定價金一圓六十錢 送料十二錢 |
| 菊池寛戲曲全集 | (一、二、三) | 各定價金一圓七十錢 送料十二錢 |
| 合本新珠 | (全) | 定價金三圓 送料十二錢 |
| 受難華 | (上、中、下) | 各定價金一圓五十錢 送料十二錢 |
| 合本受難華 | (全) | 定價金二圓八十錢 送料十二錢 |
| 時と戀愛 | 新四六版 | 定價金一圓七十錢 送料十二錢 |

山本有三氏著

| | | |
|---|---|---|
| 生きとし生けるもの | 四六版美裝 | 定價金一圓七十錢 送料十二錢 |

久米正雄氏著

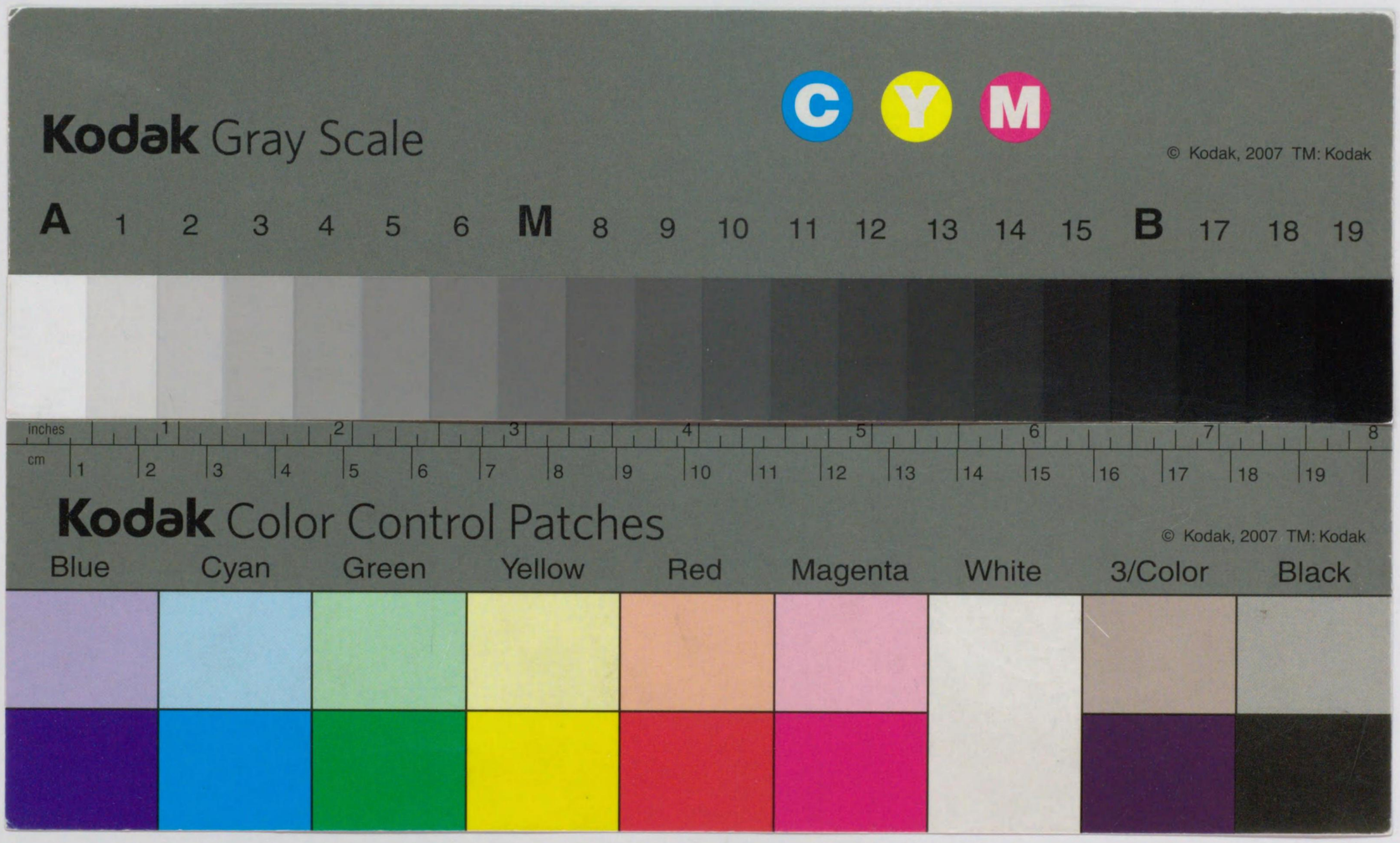
| | | |
|---|---|---|
| 天と地と | 新四六版美裝 | 定價金二圓七十錢 送料十二錢 |

25

萱花

不料憂多未可忘。一枝開淡倚斜陽。

尋思何處曾看見。記得家園近北堂。


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black